



四 盆踊りは最高潮

「さあ、続けます」

中垣が音響のボタンを押した。音楽が流れ出す。

「今夜だけでも、シンデレラボーイ・・・」

そう、荻野目洋子のダンシングヒーローの曲だ。大西さんの提案を受けて、これまでの盆踊りの曲の後に、ダンシングヒーローの曲で盆踊りを踊ってみることにしたのだ。

しかし、やぐらの周りには、木本さんを始め、自治会長などの役員、スタッフや関係者の十数人のみ。そこから離れて、昔からの地元の住民、新興住宅の住民、ニュータウンの住民がそれぞれに集団を作って、三層となって取り囲んでいる。

ただし、取り囲んでいるといっても、あっちにぼつん、こっちにぼつん、そっちにぼつん、と関係者よりもやや多い程度だ。それ以外の住人は何をしているのか。盆踊りがあることさえ忘れて、いや、覚えていてもあえて無関心で、見知らぬ他人と交わるなんてもつてのほか、面倒くさいなどの理由で、自宅で家族団らんを過ごしているのだ。

ゆっくりとした盆踊りのリズムから軽快なダンスの曲に変わった。中垣たちは、必死で踊りだす。踊りだすと楽しい。だけど、中垣たちが楽しく踊れば踊るほど、それに反比例するかのように、周囲の住民たちは、白けたのか、帰り支度をし始めている。参加者が、踊っている人が、少なすぎるのだ。やぐらを中心に奥の神社の本殿の後ろを見れば、踊っている人の数よりも鎮守の森の木の方が多い。見守る方が多いのだ。

「あーあ。盆踊りも、ダンシングヒーローも失敗か」

中垣を始め、事務局長の木本さん、事務局員さん、自治会長さん、元校長先生さんたちスタッフが肩を落とした時だ。突然、地面から何かが噴出してきた。そう、地面の皮を破ってという表現がいいかもしれない、何かが、飛び出してきた。

目も鼻の穴も口も丸くするだけで、言葉に出せない、言葉を選べない中垣たち。ようやく誰かが口に出した。

「に、にん、人間が地面から出てきた」

「いや、人間じゃない。体中が腐っているぞ」

「骨が向きだしている」

「死体だ」

「その死体が動いている」

「それなら」

「ゾンビだ」

「あー」

中垣たちは踊る手や足を止めて唾然として突っ立っている。その間にも、ダンシングヒーローの曲に合わせて、ゾンビたちは温泉が噴出したかのように次々と地面から湧き出てきた。中垣の足下からも、木本さんの足下からも、自治会長さんの足下からも。地面だけじゃない。神社の奥の鎮守の森の木の根元から這い出してきたゾンビたちが列をなしてこちらに向かってくる。目指すのは中垣たち人間ではなく、やぐらだ。ダンシングヒーローの音楽だ。

「ひゃあ」

中垣の体を何かが触った。崩れ落ちる肉片だ。中垣は触れるのもおぞましいのか、体全身に鳥肌を立てながら、つま先立ちとなった。いわゆる、満員電車のおしくらまんじゅうの中で、ポマードべったりの髪の毛から口元が逃げようとする姿勢だ。ただし、ゾンビたちは中垣を始め、踊っている参加者には決して襲い掛からなかった。踊りの輪の中に入ろうとしているだけだった。そして、遠くからただ眺めているだけの観客たちを輪の中に追い立てた。一番外側にゾンビが輪を作ったために、昔からの地元住民も、新興住宅の住民も、ニュータウンの住民も踊りの輪から逃れることはできなかった。

「さあ、急ぐぞ」

五代田は後ろを振り向く。背中には登山用のアタックザック。頭からお尻まで覆っている。六十リットルは入る大きさだ。まさに、五代田自身をもう一人背負っているようだ。しかも、右手

には海外旅行一週間分用の大きさのキャリーバッグを転がしている。その後ろには妻の美恵子と長女の恵と長男の康太が続いている。五代田は四人家族だった。長女も長男も自分用のサブザックを背負っている。唯一、悠々自適なのは妻だけだ。お土産が入った紙袋を二つしっかりと持っている。一つは、五反田の実家用に、もう一つは、自分の実家用だ。

そして、里帰りした際、五反田の実家を訪問する際には、必ず、妻自らが五代田の母親に「たいしたものじゃないですけど」と自慢を内に秘めながらお土産を渡す。これだけは五反田に決して譲らない。五反田の母親の方も「まあ。美恵子さん。いつもすいませんねえ」とにこやかに答えながらも、すぐに「あら、恵ちゃんも、康太君も大きくなったわねえ」と話す相手を変える。そこには、ささやかだが、目に見えない女の戦いがあった。

切符を確認する。三か月前からインターネットで予約した指定席だ。五代田は、毎年、年一回だけだが、夏に、そう、お盆の頃に、自分と妻の実家のある香川に帰ることにしている。三泊四日の旅だ。もちろん、一泊目は自分の実家で、残りの二泊は妻の実家で宿泊する。この力関係は、結婚して以来、変わっていない。

帰省方法は主に新幹線だ。子どもが小さい頃は、膝の上に乗せていたので、旅費は大人二人分で済んだ。だが、それも、大人二人分、子ども一人分へ、更に、成長するにつれて、大人二人分、子ども二人分、大人三人分、子ども一人分へと変更され、そして、今は、大人四人分へと終着駅を迎えた。出費もバカにならないけれど、故郷には、自分の母親と、妻の両親がいる。子どもたちが成長するとともに、自分も年を取っていることに気付き、そして、故郷の両親たちは、それ以上に、年輪を重ねている。

年を取るということは視力も老化するのか、故郷に帰るたびに、親たちの髪の毛が白くなったり、皺が増えているように見える。目をしばたたかせる。やはり、老化した目には、親たちの老いた姿しか見えない。それとともに、たまにしか見ない自分の姿が、自分が子どもの頃見て、おぼろげながら記憶に残っている親たちの姿に見えだした。鏡に親たちの写真が張っているように見えだした。そして、長男や長女は自分の小学生や中学生の頃の姿に見える。その時だけは、自分の眼が若返ったようだ。

そういうこともあり、五代田は、年に一回は必ず故郷に帰ろうとしている。本来ならば、飛行機で帰れば時間は短縮できるのだけれど、少しでも旅費を浮かそうと、新幹線で帰っている。この都会から故郷までは、新幹線から在来線に乗り換え、乗り換え時間も含めて、約五時間だ。半日以上が費やされる。だから、席は必ず座れるように指定席にしている。

まだ、結婚していない時は、旅費を少しでも浮かそうと、指定席は取らずに自由席で帰ろうとしたが、乗客が多すぎて座れずに、出入り口のドアの付近で立ちっぱなしで帰ったことがあった。

その時、一時間までは、日ごろ、通勤電車等で慣れているから何ともなかったけれど、二時間を過ぎると足が疲れてくる。三時間も過ぎると思わずしゃがみ込んでしまった。アタックザックを下して簡易椅子にして座り込む。そして、怒りが生じてくる。

こんなに高い金を出して、何故、座ることができずに立ったまま帰らないといけないんだ。ここは、立ち食いそば屋じゃないはずだ。新幹線はレストランのはずだろう。レストランでは、お客さんが多くてウェイティングルームで待つことはあるけれど、テーブルの席の横で待ったことはないはずだ。お客さんが座れないのならば、いくら要望があっても乗車券を販売すべきではないのではないか。それこそ、航空機で吊り輪に掴まっている乗客は見たことがないぞ。

そうした気持ちの高ぶりに対して、自分の以外の乗客たちは、そんな考えはこれっぽっちも持っていないかのように、ただ案山子のように立ち尽くしている。彼ら、彼女たちも、自分と同じように故郷に帰ろうとしているのだろう。そのためには、いかなる艱難苦難も厭わないということなのだろうか。いや、故郷に帰るということは修行だと思っているのかもしれない。それとも、帰省客で満員の電車を経験して、夏休みの絵日記にでも描く気か。

だけど自分は違うぞ。やはり快適な状況で実家に帰りたい。そのために、航空機の運賃はけちるけれど、新幹線の指定席はけちらないようにしている。けちにも順番があるのだ。

「ここだ、ここだ」

一番先に乗り込んだ五反田が切符を二度見て席を確認する。一列は五人の座席だ。三人用の座席に妻と子どもたちを座らせ、二人用の座席の通路側に自分が座る。既に、窓側には他の乗客が座っていた。棚には自分のアタックバッグと子どもたちのサブザックを乗せる。ついでに、妻が決して離そうとしないのに、ここぞとばかりに押し付けてくるお土産が入っている二つの紙袋も棚の上に置いた。

キャリーバッグは角ばっているため、棚の上には乗らない。だから自分の足元におく。邪魔だ。このままでは足は膝から直角になったままとなる。足を開き、キャリーバッグを太ももで挟むようにして、足を伸ばす。四時間余りもこの姿勢だと足が蟹股になったまま戻らなくなる。だからと言って、妻や子供たちの前に置くわけにはいかない。男はつらいよ。

それでも座れるだけでした。これから、在来線に乗り換えるまでの間、約四時間の睡眠ができる。それだけでもありがたい。通路をへだてた子供たちの方を見る。長女も長男も、既に、ポケットからスマホを取り出してゲームをし始めた。

妻は立ち上がると、棚に置いたアタックバッグの外のポケットからファッション雑誌を数冊取り

出すと座席に戻り、目を通し始める。そんなものを入れていたのか。雑誌は意外に荷物となる。アタックバックが重いはずだ。一瞬、ムツとなるものの、すぐに目を閉じた。この世には、見なければ済んでしまうことがほとんどなのだ。

さあ、眠るか。まだ、座席には一杯になっていないのか。次から次へと乗客たちが乗り込んでくる。だが、ここは指定席の車両だ。席の確保を心配する必要はない。胸ポケットから目隠しのマスクを取り出す。顔に当てる。これで客室内と屋外の明かりを遮ることができる。出発までは後少し。乗客は乗り込んでいるからなのか、客車の中はまだ騒がしい。だが、出発すればすぐに静かになるだろう。

出発の汽笛が鳴った。車両がするすると動き出す。

五体投地のように体を投げ出す。さあ、睡眠だ。日頃の、人生の疲れを取ろう。例え、徒労に終わろうとも。その時、車両が騒がしくなってきた。乗客が車両に入ってきているようだ。それはおかしい。ここは指定席の車両だ。指定席には指定券を持っていない客は入ってこられないはずだ。それなのに、どンドンと通路を通る音がする。そして、五代田の横にも誰かが立つ気配がした。乗客の誰もが文句を言おうとしない。緊張感のある異様な静寂だ。

一体、車掌はどうしているんだ。指定席券を持っていない乗客は追い出せよ。これじゃあ、何のために高い金を払って、指定席を取ったんだ。それに眠れないじゃないか。

五代田はアイマスクを外した。右を向く。隣の客は、まるで、死人のように青白く、また、凍りついたように動かない。息さえも止めているようだ。

左を向く。五代田の横には誰かが立っている。妻や子供たちはどうしているんだ。立っている人の隙間から妻や子供たちの姿を覗く。妻や子供たちは体をくの字に曲げ、膝に顔を隠している。そして、体は微妙に震えている。寒いのか。そう言えば、夏のせいか、空調はガンガンに効いている。車掌にもう少し空調を弱めてもらうように言おう。どちらにせよ、指定車両に乗客を乗せていることについては文句を言わなければならない。

車掌はどこだ。

顔を上げる。目が大きく開いた。まぶたが眉毛に引っ付いたかのように下りてこない。また、鼻の穴も大きく開く。だけど、息が吸えない。口は半開きだが、声は出ない。口の中はよだれが溢れてくる。その度に、唾を飲み込む。体中が硬直する。体中から毛を抜かれたかのように鳥肌が全身に浮かび上がる。皮膚がひとつ一つの細胞から成り立っていることを改めて身に染みて思い知る。心臓が自分だけ恐怖から逃れるようと体の中から脱出するために激しく打ち叩いている。

ようやく目玉だけは動かせた。唯一、自分の意思で体の中で動くのが目玉だけだった。

おい、五代田。しっかりしろ。目玉だけが現実を把握しようと努める。急に、ゲゲゲの鬼太郎の目玉のおやじを思い出した。もちろん、目玉がしゃべる訳がない。あれは、いかなる状況においても、自分の目でしっかりと物事を見ろ、と作者は教えてくれているんだ。

まぶたが閉じない。恐怖という強力な接着剤のせいだ。それでも、指でまぶたを引っ張り下し、再び、強引にまぶたを引っ張り上げた。一度、目を閉じることで、夢でないことをはっきりとさせるためだ。瞳の焦点があった。そこには、普通の人間でない人間が立っていた。そう、普通ではない。常識に当てはまらないのだ。それも一体ではない。数十体、数百体だ。こんな狭い車両にどうやって入ったんだ。驚くしかない。不思議でしかない。ゾンビたちの満員電車。押しくらまんじゅうだ。

立つことができないゾンビたちは、そのゾンビたちの足元で寝転がっていたり、棚に乗っかかっていたりする。また、ゾンビたちは体を直角にして、乗客たちの頭や背中に顎を乗せるなど、奇妙なポーズをしている。少しでも、空間を作り、一人でも多くのゾンビたちを車両に乗せるために工夫しているのだろう。ゾンビたちは仲間意識が強いのか。そのあおりを受けて、ゾンビから少しでも逃げようと妻や子供たちを始め、人間たちは自ら体を折り曲げているのだ。納得した。

五代田は、眼科検診の時のように目玉を斜め上に動かす。自分の頭の上にはゾンビの顔があった。あって欲しくないのに目が会った。ゾンビは申しわけなさそうに頭を下げた。それを見て、ようやく五代田も安心した。彼らは自分たちを襲うためにこの新幹線に乗り込んだのではない。どこかに移動するために乗ってきたのだ。たまたま空いていたのがこの車両だったのだ。落ち着け、落ち着け。もうしばらくの辛抱だ。いつまでかはわからないけれど。

五代田はようやく動き出した肺を使って深呼吸を繰り返す。吐いて、吸って、吸って、吐いて、吸って、吸って。口に出して、繰り返す。口に出さないと、呼吸が止まりそうだった。

五白田の予想通り、新幹線が駅に止まるたびに、ゾンビと一緒に乗客たちも下車していった。ゾンビたちは大きな旅行カバンを持っている者に対しては何もしなかった。ただし、背広姿などのビジネスマンやビジネスウーマンたちなどには容赦なく飛び掛かった。襲われたビジネスマンたちは首筋を始め、体中を噛まれると、ゾンビに変身していった。そして、ゾンビに変身したビジネスマンたちは、本来であれば、会社や自宅に帰るはずなのに、途中下車をして、どこかに消えていった。誰かに指示されるわけではないけれど、天命のような指示の下、どこかに向かって行った。もちろん、その向かった先は、うさぎ肉が美味しい、いや、うさぎ追いし故郷だったのだが。

この話は口コミからすぐに全国ニュースに広がった。これまで、頑なに故郷に帰ることを拒んでいた人々も、手に取るものを持たずに、航空機で、電車で、フェリーで、バスで、自家用車で、自転車で、徒歩で帰ることにした。ゾンビから自らの命を守るために、故郷でお墓参りをするために。盆踊りをするために。